

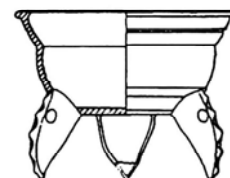
## 山東竜山文化土器類型の動態

村上章義

山東竜山文化研究における「類型」研究を土器の型式学的研究として見た場合、「類型」の設定および編年に終始しており、「類型」間の関係に踏み込むまでには到っていない。その原因の一つは、在地系土器と異系統土器との峻別を行っていないことにある。

本稿は、この在地系土器と異系統土器との峻別、すなわち類型を土器型式としての実態により近い形へと再編し、その試案を提示すること、そしてその試案に基づいて類型間の変化を説明することを目的とするものである。

時間的、地域的に器形の差異の明瞭な鼎、鬲を分析の対象とする。また、分析の対象とする遺跡は、後述するような条件に見合った遺跡とした。分析の手順は、調査報告の型式分類および編年に基づいて遺跡ごとに型式の出現時期や消失時期および各時期における出土量を求め、型式の消長やその出土量の多寡から各遺跡における主体的な型式と客体的な型式の区別を行なった。本稿では、このようにして得られた型式のセットを類型として設定した。そして、時間的に器形変化の明瞭な高柄杯から遺跡間の相対年代および同時性を求め、類型の分布範囲および関係や変化を考察した。



嘴形足鼎  
(西呉寺遺跡出土)

分析の結果から、「両城類型」では鑿形足鼎と聯襠実足鬲が、「姚官莊類型」では板形足鼎と聯襠袋足鬲が、「尹家城類型」では嘴形足鼎と分襠袋足鬲がそれぞれの類型における特徴的な型式であり、特に三足のつくり

が各類型の特色となることが判明した。

前期の状況を見ると、諸城呈子遺跡、胶県三里河遺跡、日照堯王城遺跡において、「両城類型」が見られ、濰県獅子行遺跡において、「獅子行類型」が見られる。泗水尹家城遺跡の地域では資料が少なく鑿形足罐形鼎が見られるのみであるが、高柄杯からも「両城類型」が主体であると考えられる。

中期の状況を見ると、諸城呈子遺跡、胶県三里河遺跡、日照堯王城遺跡に変化は見られないが、濰県獅子行遺跡において、新たに「姚官莊類型」が出現する。泗水尹家城遺跡および兗州西呉寺遺跡において、「尹家城類型」が見られる。

後期の状況を見ると、諸城呈子遺跡、胶県三里河遺跡、日照堯王城遺跡、泗水尹家城遺跡、兗州

西呉寺遺跡において、「尹家城類型」が見られる。  
一方濰県獅子行遺跡では、ともに、有附加堆紋板  
形足罐形鼎と平底実足鬲のセットが見られる。鼎  
足に附加堆紋を施すのは「尹家城類型」に特徴的  
なものであり、「尹家城類型」の影響のもとで「姚  
官莊類型」が変質したと考えられる。